キャリバンの夢

篠　原　健　吉

序　論

ウィリアム・シェイクスピア（William Shakespeare, 1564-1616）単独による最後の作品とされる『テンペスト』（*The Tempest,* 1611）には魔女の子であるキャリバンが登場する。劇の中盤、その魔女の子が眠りの中で見た夢について語る場面がある。

Be not afeard, the isle is full of noises,
Sounds, and sweet airs, that give delight and hurt not.
Sometimes a thousand twangling instruments
Will hum about mine ears ; and sometime voices,
That if I then had waked after long sleep,
Will make me sleep again, and then in dreaming
The clouds methought would open and show riches
Ready to drop upon me, that when I waked
I cried to dream again.　　(3.2.133-41)[1]

この台詞は「キャリバンの生まれ持った感受性の証として、あるいはこの島の魔術的な雰囲気の証左として引用されることが多い」とラス・マクドナルド（Russ McDonald）が述べるように(225)、先行研究では主に感性と島の特性描写という二つの観点から採り上げられてきた。例えばエドワード・ダウデン（Edward Dowden）は「より高次の世界を僅かながらもキャリバンが感じている証」と見て（420)、フランク・カーモード（Frank Kermode）は彼の音楽を感じる力を賞賛した（295-96)。さらにG・ウィルソン・ナイト（G・Wilson Knight）は魔法に抑圧されてきたキャリバンこそが、エアリエルの調べを描き出す言葉を熟知する者だと言う（24-25)。また、セオドア・スペンサー（Theodore Spencer）はこの台詞が変容を可能にする島の特徴を表すものだと述べた（457)。

この他、夢の中身が不可思議なものであることから、その内容についても研究されてきた。レ

スリー・A・フィードラー（Leslie A. Fiedler）は、プロスペローの魔法に汚染され、成型される前の世界、すなわち現実と夢が分かれる前の自然が存在する世界をこの夢は描いているのだと考えた（235-36）。またポール・ブラウン（Paul Brown）は、自由への悲願と現実逃避から、権力の世界とは隔絶された牧歌的な空間としての島を夢の中でキャリバンが創り出したのだと言う（66）。これらの延長線上にあるのがトム・リンゼイ（Tom Lindsay）の主張であり、彼はプロスペローやミランダが居なかった頃の世界が夢の中で再現され、その頃に戻りたいというキャリバンの願いが夢に表れているのだとした（420-21）。他方、テリー・コミト（Terry Comito）は、この島が秘める驚きに満ちた可能性に対する希求が夢に表れていると考え（48）、ニール・H・ライト（Neil H. Wright）は、夢に描かれる原始的な天国を癒しと喜びの世界とし、キャリバンは音楽によって苦痛と苦役の経験世界から聖域である夢の世界へと移行するのだと述べた（257）。さらにノーマン・N・ホーランド（Norman N. Holland）はフロイトの心理性的発達理論を用いた夢の解釈を試みるなど、キャリバンの夢は実に様々な観点から論じられてきたと言える。

これらの主張に共通しているのは、夢がキャリバン自身から生じたものだということに一切の疑念を抱いていないということである。これはノースロップ・フライ（Northrop Frye）が述べるところの「ヘラクレイトスからフロイトに至るまで、夢は夢を見る者の私的な領域の中核となるものだと認識されてきた」（108）という見地の踏襲に他ならない。本論では、この観点からキャリバンの夢をみることに対して疑問を投げかける。

確かに夢はキャリバン自身が見たものである。それゆえ夢の内容はホーランドらが述べるように、彼自身の願望が生み出したものだと言えるのかもしれない。しかし本劇が上演された当時の状況を振り返ると、夢にはいくつかの種類が存在すると考えられていたことがわかる。また夢が生じる原因については、当人の行動だけでなく、超自然的な存在から夢が送られることもあるとされていたようだ。仮に原因が後者であった場合、真の夢の製造者／所有者は夢を見た者とは別の存在ということになる。とすれば、本来は個人の私的な領域の中核を成すはずの夢が、第三者の意志を映す媒体と化していた可能性すらある。本劇は、近年ではポストコロニアルの論点から論じられることが多いが、夢の原因とその意味を探ることで支配者と被支配者の関係性についても再考できるのではないだろうか。

そこで本論では、当時の夢に関する考え方を通説・医学・宗教的観点から考察し、それらを基にキャリバンの夢の種類を特定する。その上で本劇の劇構造と夢を見た状況から、夢の様相を精査しその原因を探る。それにより夢が何を意味していたのかを明らかにしたい。

1　夢とは何か

英国ルネサンス期の人々にとって、夢とはどのようなものであったか。また、夢はどのようにして生じると考えられていたのか。まずは時代を少し遡り、ヘンリー八世在位の時代に優秀な医

師とされたクリストファー・ラントン（Christopher Langton, 1521-78）の記述から考えてみたい。

ラントンは『医術入門』（*An Introduction into Phisycke,* 1545）で、ホメロスの夢の門の例を挙げつつ、夢とは「眠りの中で作られる想像物以外の何物でもない。眠りの際、我々の思考の道具である様々な精気が脳内に集合し、多様なイメージを創り出すのである」と記した（87）。その上で夢には四つの種類が存在するとした。

彼によると第一の夢は「自然な夢（natural dreams）」であり、その名の由来は万人に共通するものだからだという。この夢は起きている時に考えたことを描き出すことから、裁判官は争い事の夢を見るというように、見る人の生活に密接する。(2) また、粘液質の人が泳いだり溺れたりする夢を見る等、四体液理論における気質とも繋がりがある（87）。第二の夢は「予知夢（dreames that foreseeth thynges to come）」であり、この夢は文字通りこれから起きることを予見する。ただしこれは神の力でも、体液の活動、その質や量によるものでもない。ある一定の特質を備えた人が見るものだという（88-89）。第三の夢は「神の力による夢（godlye）」である。この夢は予知夢と同様に未来のことを予言する。しかし、神の力が人間の心の中で働いているという点、また真実が存在するという点で予知夢とは異なる（89-90）。それゆえ神の力の夢については信頼を置くべきであるが、予知夢については多くの点で曖昧性に満ちているとし、これまで多くの国王や指揮官が騙されてきたことからも信頼すべきではないと言う（90-93）。第四の夢は「悪魔の夢（diuylysh）」である。この種の夢には魔女たちが見る饗宴や戯れの夢の他、悪魔が眠る人に見せる悪夢も含まれる（90）。

ラントンから67年後、ニューファンドランドの植民地推進者で作家のウィリアム・ヴォーン（William Vaughan, 1575-1641）は、『テンペスト』とほぼ同時期に題名を変更して再出版した『健康を保つための公認指示書』（*Approved Directions for Health,* 1612）の中で、夢とは「過去の出来事の象徴」および「未来の出来事に大きな影響を与えるもの」と記した。その上で彼は夢を「神聖な夢（diuine dreams）」、「超自然の夢（supernaturall dreams）」、「自然な夢」の三種に分類した。

彼によれば、神聖な夢は「霊感を通じて神から予言者や誠実な僕に送られるものであり、神が真の創造主であるように、送られる夢もまた真実であり確かなもの」だという（61）。他方、自然な夢は肉体や魂の情感を表現するものであり、この種の夢は外的な、または内的な影響を受けて生じるとされた。外的要因としては水分を含む食物が挙げられており、いずれも悪夢と結びつく。一方、内的要因としては悪い体液が挙げられており、特に憂鬱症が脳内の理解力を曇らせ、悩ましい夢を生じさせるとした（63-64）。残る超自然の夢は、神聖な夢と自然な夢の中間に位置するとされた。ゆえにその発生原因は多岐に及ぶ。超自然の夢は神から贈られずとも発生することがある一方で、自然な夢のように体液が原因で発生することもある。さらに、肉体が休息している間も目覚めている精気が善天使や超自然的な存在からの鼓舞によって助力を受け、歓喜する

ことによっても生じる。この種の夢は通常これから起こることを表すとされた。また、摂取した食物によって体内で生じる霧から脳が解放される朝方に発生しやすいという特性もある（61-62）。[3]

ヴォーンの解説には、神聖な夢や自然の夢など、多くの点でラントンと共通する要素がみられる。唯一大きく異なるのは悪魔の夢の扱いである。ヴォーンにはこの種の夢が存在しない。とはいえ、このことが17世紀の初頭に悪魔の夢という区分が消失したことを意味するわけではない。

聖職者のトマス・クーパー（Thomas Cooper, 1569/70-1626）は、彼が著名人になる契機となった『魔術の神秘』（*The Mystery of Witch-craft,* 1617）の中で、ヴォーンと同様に夢の種類を三種に分類した。その際、神から送られる夢を神聖な夢とし、四体液の気質や心の状態、頭の中で考えていたこと等が影響する夢を自然な夢であるとする点はヴォーンとほぼ変わらない（145-46）。[4] 異なるのは、超自然の夢の代わりに、ラントンが言及した「悪魔の夢」を組み入れている点である。ただしクーパーの悪魔の夢とは「サタンによって脳内に形作られるものであり、見る人の欲望に答え得るもの」（146）とあるように、必ずしも悪夢とは限らない点に注意がいる。また、スコットランドのジェントルマンであるデイヴィット・ピアソン（David Person）も『種々様々』（*Varieties,* 1635）の中で同様に悪魔の夢の存在を取り上げていることから、この種の夢が多少内容を変えつつも変わらず周知されていたことが分かる。

そのピアソンは、夢には自然・神聖・悪魔の他、第四の夢として「偶然の夢（Accidentall dreames）」が存在すると述べた。しかしその詳細を見てゆくと、「偶然の夢は、食事や日中に心に抱いた恐怖や喜び等によって引き起こされる」（252）とあることから、ヴォーンらが述べる自然の夢が細分化されたものであると分かる。また、ウォリックシャー出身の聖職者ニコラス・バイフィールド（Nicholas Byfield, 1579-1622）も、『信仰の規範』（*The Rule of Faith,* 1626）でピアソン同様に夢は四種存在すると記し、自然・神聖・悪魔の他「教訓的な夢（Morall dreames）」を追加した。だがこの夢も「日中に並々ならぬ影響を受けた仕事や学習から生じる」（374）とあることから、やはり自然の夢から分割されたものであると言える。

これらの解説に共通するのは、夢の原因となるものがかなりの程度特定されていたこと、またその特定された原因を基に、夢を三種から四種に分類していたことである。無論、このような考え方が全ての人に受け入れられていた訳ではない。ジェローム・マンデル（Jerome Mandel）によれば、トマス・ナッシュ（Thomas Nash, 1567-1601）をはじめとした当時の懐疑主義者たちは、このうち自然な夢しか認めていなかったという。彼らにとって夢とは想像力の乱れによって生じる眠りの体験でしかなく、夢が未来を語ることはあり得ないとされていた（61-62）。だがそれはあくまでも例外である。アルテミドロスの『夢判断の書』（*The Iudgement, or Exposition of Dreames*）が1606年の英訳初版から1644年に至るまで第四版を重ねたことからも窺い知ることができるように（武井 28）、一般的には夢に対して懐疑主義者が提唱する消極的な態度を取ってい

なかったと思われる。むしろ先に示した夢の詳細な解説の存在が示唆するように、積極的に夢の種類を認め、その原因を知ろうとしていたのではないか。

そうした論調は特に宗教関係者たちの間で活発だったようだ。クーパーは、夢が神の意志を神の僕たちに示す方法の一つであったと認める一方で、サタンもまた狡猾に神の真似をし、夢や幻視によって彼の僕たちに未来のことを語らせ欺いてきたと言う。それゆえ見た夢がどういった種類の夢なのか、識別し認識することが重要なのだと説いた（144-45）。彼によれば、神聖な夢はキリストの敵を暴くことであり、キリストの到来であるといった、知っておくべき普遍的な事柄に関するものだが、悪魔の夢は不可思議なものや些細でつまらないもの、あるいは無駄な事柄であったりして、知るに相応しくない価値のないものだという（146-47）。同様に聖職者であったジャーヴァス・バヴィントン（Gervase Bavington）も、罪深いように思える夢を見た際、その意味を知るためにも原因を考えることが大事だと説いた（499-500）。さらにバイフィールドも、夢は身体の状態を表すだけでなく、密かに犯しやすい罪の発見にも役立つと述べる（375）。要するに宗教関係者にとって夢とは、人の身体や精神の状態を表すものというだけでなく、人をあるべき方向へ導くものであるのと同時に、人を惑わせる危険性をも孕むものでもあったと言える。だからこそ彼らは夢を注意深く考察し、原因を解き明かしてその意味を理解する必要があると人々に説いたのだ。

2　夢の特定

当時の人々の夢に関する認識が上述した通りであるとすれば、キャリバンの夢にも原因となるものがあり、彼自身に何か重要な示唆を与える意図があるものとして描かれた可能性がある。そこで先述した解説を参考に、まずは彼の夢の種類を考えたい。

キャリバンの夢の種類について第一に言えることは、それが神聖な夢ではないということである。ヴォーンによれば、神聖な夢は予言者や誠実な僕に送られるというが、キャリバンはそのどれにも当て嵌まらない。ゆえに彼が神聖な夢を見ることはまずあり得ない。(5) したがって彼の夢は、偶然の夢や教訓的な夢を含む自然な夢か、悪魔の夢、あるいは超自然の夢のいずれかになる。ただし自然な夢と考えるには困難な点が存在する。

自然な夢は外的要因である食物の摂取や内的要因である体液の影響、または日中に考えたことや体験したこと等によって発生するとされた。このうち食物が引き起こす夢は悪夢とされていることから除外できる。また体液の影響については、彼の主要体液という観点から除外可能である。

ローレンス・バブ（Lawrence Babb）によれば、シェイクスピアの時代、人間の体内に存在する液体物はほぼ全て、血液、胆汁、黒胆汁、粘液の四つに分類できると考えられていた。(6) この四体液が適切な割合で混ざりあった状態が理想的であるとされていたが、実際の体液の割合は個々人によって多かれ少なかれ差があった。そしてこの差こそが個々人の性質を生み出すものだ

と思われていた（6-9）。つまり、個人の容姿や行動はその人の主要な体液によってかなりの程度、決定づけられるという考えが周知されていたのである。例えば性格に関しては、多血質の人は陽気で愛想が良く、賢く勇敢。粘液質の人は鈍間で怠惰、愚鈍であり、胆汁質の人は気短で無分別、傲慢で復讐心に長け、大胆かつ野心家、抜け目ない。憂鬱質の人は粗野で強情、貪欲で意思疎通を嫌がり孤独を好むとされた。他方、容姿に関しては、多血質の人は肉付きや血色が良く、金髪で愛想のよい表情をしているが、粘液質の人は背が低く太っていて青白い顔をしており、胆汁質は毛深く痩せており、憂鬱質の人は痩せてひょろ長く浅黒い等とされた。さらに憂鬱質の人はこれらの中で最も不格好であったという（9-10）。

キャリバンの行動や姿をこれらの区分と比較してゆくと、彼の体内では憂鬱質の体液が優勢であったと考えられる。確かに彼は多血質の人のように、酒を飲んでは楽しく歌い、女好きでもあるが、愛想がよく勇敢であるとは言い難い。また、プロスペローに対する怒りっぽさや執念深さ、そして暗殺計画を語る際には“Having first seized his books”（3.2.87）と提言する点では、抜け目のない胆汁質の人を思わせるが、王になろうという野心は持ち合わせておらず、プロスペローに“I'll rack thee with old cramps,”（1.2.368）と脅されれば、その恐怖に尻込みしてしまうように（1.2.370）、大胆さに欠ける。粘液質の特徴である鈍間や怠惰についてはプロスペローが指摘するところだが（1.2.315-16）、ステファノーらに暗殺を嗾け、実行に導いたその狡猾さを鑑みれば、プロスペローに対しては反抗心から故意に鈍感に振る舞っていたとみるべきだろう。愚鈍についてはトリンキューローが指摘しているが（2.2.138-39）、彼がステファノーを崇拝したのは無知ゆえであり、最終的にキャリバンは彼らの卑小さを知った時に“drunkard”（5.1.296）、“dull fool”（5.1.297）と冷徹な言葉を発している。これらに対し、憂鬱質の特徴に関しては明確に否定できる点が見られない。粗野で強情、貪欲という点は、“A devil, a born devil”（4.1.188）と嘆くプロスペローの評価が裏付ける通りである。一方、意思疎通を拒み孤独を好む点に関しては、劇中の様子からでは確かに疑問が残る。だが、プロスペローらに出会うまでのキャリバンは孤独な存在であり、言葉を教えようとしたミランダに対して獣のように喚きたてまくる様は（1.2.354-55）、意思疎通を拒んでいたと解することもできる。またその半人半獣の姿は、四気質の中で憂鬱質が最も不格好であることを鑑みれば、この劇において彼以上に適当な存在は他にいない。さらにエレメントという観点からみても、エアリエルの大気に対して大地と比較される彼は、やはり憂鬱質ということになるだろう（Schlegel 395）。ジョン・W・ドレイパー（John W. Draper）もこの点を指摘し、他の憂鬱質の特徴を持つシェイクスピアの登場人物を挙げながら、キャリバンは憂鬱質だと主張する（79-80）。

ところが、キャリバンが憂鬱質であり、なおかつ彼が見た夢が自然の夢だと仮定すると、その内容に矛盾が生じてしまう。ラントンらの解説によれば、憂鬱質の人は死や危険、孤独の夢を見るとされたが（Langton 87; Person 251-52）、キャリバンの夢にそのような要素は見当たらない。

ゆえに彼の夢は四体液が影響を及ぼす自然の夢ではないと言える。

この他、自然の夢から分岐した偶然の夢や教訓的な夢も、彼の夢には当て嵌まらない。プロスペローから追放されて以降、彼の頭の中は殆どプロスペローに対する恐怖と怒りに満ちた呪いの言葉で埋め尽くされている。(7) ゆえにもし彼が偶然の夢を見るとすれば、プロスペローに悪態をつくか魔術の恐怖に怯える夢になる。また薪を運ぶ等の雑用を日々課されていることから、教訓的な夢であればそれに因んだものになるはずである。

残るは悪魔の夢と超自然の夢だが、このうち悪魔の夢かどうかについては否定も肯定もできない問題がある。確かにクーパーは不可思議な内容であることを悪魔の夢の特徴の一つに挙げている。また、キャリバンが再び夢を見たいと泣いたのは、それが彼の欲望に答えるものだったからかもしれない。しかし悪魔の夢の最も際立った特徴は、精神を堕落へと導く騙しの意図が存在することであり、彼の夢はその点が不明瞭である。

一方、超自然の夢である可能性については、キャリバンの夢が目には見えない存在が音や声を発しているという超自然的現象を背景として成立していること、そしてその声が、たとえ長い眠りの後だとしても再び眠りを誘発する尋常ならざるものであること、さらにその奇妙な眠りの中で夢を見たと語っていることから（3.2.136-38）、この種の夢である可能性が極めて高いと考えられる。

劇中ではステファノーがこの夢を超自然の夢だと解釈している。彼は当初、正体不明の音楽を悪魔の仕業だと思い込み、酷く怯えた（3.2.125-30）。しかしキャリバンから夢の話を聞いたことで態度が一変し、“This will prove a brave kingdom to me, where I / shall have my music for nothing.”（3.2.142-43）と喜ぶ。確かにキャリバンの夢は不可思議なものだが、それを見たキャリバンはもう一度見たいと泣いただけであり、そこに悪魔的な騙しの要素は見当たらない。それゆえその夢は超自然の夢と考えるのが妥当であり、音楽もまた悪魔の仕業ではなく超自然の存在によるものと解したのだろう。ステファノーはおそらく、この種の夢がこれから起こることを表すという点から、彼が引き継ぐ王国の未来の姿を“riches”の中に想像し、先の台詞を述べたに違いない。だが、夢をもたらした超自然の存在の正体がエアリエルであるとすれば、ステファノーの解釈とは異なる、別の登場人物の思惑がこの夢から見えてくる。

3　エアリエルという存在

エアリエルは様々な姿に形を変え、人が足を踏み入れることのできない場所へも飛んで行ける空気の精霊（spirit）である。もっとも第四幕第一場の終盤、散々な姿となって登場したステファノーとトリンキュローは、姿の見えないエアリエルを精霊ではなく妖精（fairy）と呼ぶ。この時代、妖精は超自然の存在として一般的に精霊の仲間に組み入れられ、悪だけでなく善も為すことがある存在だと認識されていた（Thomas 724）。したがって両者の間に認識上の大きな差異は

なかったのかもしれない。シェイクスピア自身、『夏の夜の夢』（*A Midsummer Night's dream*, 1595-96）では妖精の女王であるティターニアに“I am a spirit of no common rate”（3.1.289）と語らせている。また、こうした妖精の中には、『ロミオとジュリエット』（*Romeo and Juliet*, 1595-96）で言及された、眠っている人に夢を見せるマブの女王（1.4.53-54）もいた。ゆえに、奇妙な音楽も雲間に見えた宝の夢の話も、全てが妖精の悪戯だったのではないかとステファノーらが疑うのも無理はない。

しかし、エアリエルの姿を見ることができ、尚且つその性質を熟知しているプロスペローが一度としてエアリエルを指して妖精と呼ぶことがない点は無視できない。彼は一貫してエアリエルを精霊（spirit）と呼ぶのである。このことは彼が魔術師であることと無関係ではないだろう。

使い魔（familiar spirit）という言葉が16世紀の半ばから表れ始め（*OED* 3.a）、その後裁判記録の中でもしばしば言及されたように（Thomas 530）、当時の人々は魔術師が召喚し、自分の手先として使用することができる精霊が現実に存在すると信じていた。かつてエアリエルが魔女に仕えていたという話（1.2.270-71）、またその変幻自在性から（Thomas 256）、彼もこの種の精霊であったことが窺える。つまりプロスペローにとってエアリエルとは、ホブゴブリンやロビン・グッド・フェローといった特定の形状を持ち、自らの意志で自由に動き回り悪戯をする妖精ではなく、主を持ち、その者のために固有の力を行使する使い魔としての精霊なのである。

ただし、この魔術師と使い魔の主従関係は通常想定される関係にはなっていない。中野春夫が指摘するように、ルネサンス魔術に見られるような召喚によって生じた主従関係ではなく、むしろ親方と弟子といった世俗的な徒弟制度の主従関係を彷彿とさせるものである（335-36）。実際、二人の間には妙な人間臭さを感じさせるやり取りがある（Gurr 199）。エアリエルはプロスペローに対し、これまで誠心誠意尽くしてきたと語り、年季奉公を短縮する約束を思い出して欲しいと訴える（1.2.246-49）。それに対しプロスペローは恩を忘れるなと叱りつけるが、結局は約束を守ると宣言し、エアリエルは大喜びするのである（1.2.298-300）。

このことから、二人の関係は契約を交わした親方と弟子のように、互いを信頼することで成り立っているものであることが分かる。そしてこの信頼関係こそが、本劇においては絶対的な命令遵守の姿勢を擁する強固な主従関係を築き上げている。この点は、信頼関係が破壊され、命令実行のためには強制力を伴う必要のあるプロスペローとキャリバンの主従関係とは対照的である。すなわち、言い付けを守らない不実なキャリバンに対し、プロスペローを信頼するエアリエルは、全ての命令を着実に実行し彼の言いつけを遵守する。つまりエアリエルはプロスペローの忠実な命令遂行者と言えるだろう。となれば、エアリエルがキャリバンに夢を見させた超自然の存在であるとしても、それは彼自身の自由気儘な悪戯によるものではなく、主プロスペローの意志が反映されたものだと見るべきである。

4　夢を送る

だが、二つの疑問が残ったままである。一つはキャリバンに夢を送ったのが本当にエアリエルなのかどうかという点だ。島にはエアリエルの他にも多数の精霊が存在する。それらが関与している可能性は否めない。二つめはプロスペローの意志を、すなわち彼が描いたイメージをエアリエルが夢として他者に送ることができたのかという点である。これらの問題については主に音の観点から説明できるように思われる。

エアリエルは歌を唄う精霊であり、楽器を奏でるのも得意である。実際、本劇の音楽はキャリバンらが陽気に歌う唄を除き、全てこのエアリエルが主体となり関わっているほど、彼と音楽の結びつきは強い（1.2.373, 2.1.182, 294, 3.2.119, 3.3.17, 82, 4.1.58, 138, 5.1.52, 87）。とすれば、キャリバンが夢を見た際に聴いたという音や声も、全て彼の仕業であった可能性がある。そこで本劇の特殊性を踏まえつつ、まずはこの点を明らかにしたい。

ハロルド・F・ブルックス（Harold F. Brooks）によれば、『テンペスト』では劇構造のみならず、登場人物やその台詞、そして劇のテーマにおいてさえも相関関係を見ることができるという（52）。ブルックスはこれを「全てが反射し、また反射し返す鏡の部屋」（37）のようだと表現したが、キャリバンが音や声を聴いたという場面にも、それと対を成すかのように反射し返す場面が確かに存在する。

第一幕第二場には、エアリエルの音楽に導かれたファーディナンドが登場する場面がある。ここでファーディナンドは“Where should this music be?—i’th’ air, or th’ earth?”（1.2.388）と述べた後、

> Sitting on a bank,
> Weeping again the King my father’s wreck,
> This music crept by me upon the waters,
> Allaying both their fury and my passion
> With its sweet air.　　（1.2.390-94）

と語る。他方、キャリバンは“the isle is full of noises, / Sounds, and sweet airs, that give delight and hurt not.”（3.2.133-34）と言う。アラン・H・ギルバート（Allan H. Gilbert）は、この二つの台詞にパラレリズムの構造があることを指摘し、ファーディナンドが音楽に、キャリバンが雑音について語っていることから、それらが王子と野蛮人という各々の特質を反映したものであると述べた（73）。だが、この場面に見られるパラレリズムはそのような特質を際立たせるだけでなく、キャリバンの回想に現れる音の正体をも映し出しているように見える。

ファーディナンドが聴いた歌は、空中なのか地中なのか、どこで鳴り響いているのか正確な位置が割り出せないほど空間を満たすものであり、さらに感情に変化を及ぼすものであった。一方のキャリバンが聴いた雑音や音も、周辺の空間を満たし、感情に変化を生じさせるものである。つまり二人の台詞には、選ぶ言葉の違いこそあれ、音の指向性やその性質といった点で類似性が見られる。それゆえ音の発生源は同じであると考えて良いだろう。すなわち、キャリバンが夢を見た際に聴いたのは、ファーディナンドが聴いたのと同じ、エアリエルの音楽やその歌声であった可能性が高い。

それでは夢が音楽や歌にのせて届けられるということはあるのだろうか。換言すれば、眠る者の耳に何らかのイメージを伴った歌が届き、それを夢として見ることは有り得るのか。この点についてはゴンザーロの眠りが参考になる。

第二幕第一場では、エアリエルの登場の後、荘厳な音楽と共に舞台上の人物たちが次々と眠りに落ちてゆく様が描かれる。この時、例外的に眠りを与えられなかったのが裏切者の二人であり、彼らは眠るナポリ王アロンゾ―を殺害しようとする。だがその直前にエアリエルが王の忠実な臣下であるゴンザーロの耳元で歌を唄う。

> While you here do snoring lie,
> Open-eyed conspiracy
> His time doth take.
> If of life you keep a care,
> Shake off slumber, and beware.
> Awake, awake ! (2.1.298-303)

歌を聞いたゴンザーロは“Now, good angels / Preserve the King !”(2.1.304-05)と叫びながら目を覚ます。目覚めの一声としては奇妙とも言えるこの言葉は、リチャード三世の“Give me another horse!”(*R3*. 5.4.157)、あるいはイノジェンの“Yes sir, to Milford Haven,”(*Cym*. 4.2.293)といった、突発的に眠りから覚め、現実と夢の境界線が曖昧になっている時の台詞を想起させる。おそらくゴンザーロも彼らと同様、眠っている間に夢を見ており、その夢の中で感じていたことが目覚めて開口一番、飛び出したのだろう。「王をお守りください！」という内容からすると、寝ている間に自分たちの身に危機が迫るというエアリエルの歌のイメージをゴンザーロは受け取ったものと推測できる。

このような歌とイメージの結びつきについて、ゲイリー・トムリンソン(Gary Tomlinson)はルネサンス期におけるネオプラトニズムの観点、とりわけ同時代で影響力の強かったマルシリオ・フィチーノの理論から、物質である肉体と非物質である精神を結び付けるメタテクノロジー

としての精気（spirit）の活動に注目した。歌の霊的かつメタテクノロジー的な活動の中心地が精神における低次元の機能の一つである空想力ないし想像力にあることから、歌が空気の振動を通じて想像力という非物質的な空想にイメージを刻み込むのだと言う（236-38）。この想像力とは、バブによれば人間の内的感覚の一つであり、判断力、記憶力と共に脳に位置するとされた。人が何かに触れたり、聞いたり、目にした時、その情報はまず別の内的感覚である判断力に委ねられる。判断力はその情報を取り纏め、それが何であるのかを理解し、想像力に引き渡す。想像力は渡された情報を元に、それを吟味してイメージを統合するのである。この想像力が他の感覚器官と大きく異なるのは、休みをとることなく常に活動し続けているという点にある。ゆえに想像力は人が眠る間も働き続け、心に夢を見せるものだと当時考えられていた（3）。またマンデルは人体の外部から想像力に影響を与えるものとして、精霊の存在を挙げた。彼によれば、精霊には人の体液と肉体の精気を軽く揺さぶることで想像力や感覚に影響を与える力があると信じられていたという（63）。

これらのことを統合すると、精霊エアリエルの歌を聞いたゴンザーロが、想像力に特定のイメージを刻印され、そのイメージを夢として見たとしても何ら不思議ではないことになる。この点についてはキャリバンにも同様のことが言えるだろう。彼もまたエアリエルの歌を聞いたことで、あの謎めいた夢が彼の想像力に刻印されたと言えるに違いない。ただしそのイメージは、エアリエルがゴンザーロの前に現れた際、プロスペローの命を受けて来たと述べたことからも明らかなように、エアリエルではなくプロスペローの意図を表したものであることに注意がいる。この意味において、超自然的存在のエアリエルは対象者の想像力にイメージを送り込むための媒体に過ぎない。

この点が最も顕著に見られるのは第四幕第一場のページェントの場面である。プロスペローはここで、自身が描いたイメージを娘と婿の前で披露する。彼のイメージはエアリエルらによる音楽・詩を通して具現化されるが、プロスペローの心に乱れが生じた途端、音楽が乱れイメージは崩れ去る。

> *They join with the nymphs in a graceful dance, towards the end whereof Prospero starts suddenly and speaks, after which, to a strange hollow and confused noise, they heavily vanish*（4.1.138 SD）

この乱れが、“Well done, avoid. No more.”（4.1.142）と命じる前から生じていることから、プロスペローの思考がエアリエルらを通じて、音楽のみならず神々のイメージをも直接創り出していたことが分かる。

以上のことからキャリバンが見た夢とは、プロスペローが忠実な僕であるエアリエルを用いて

キャリバンの想像力に送り込んだ、プロスペローが描いたイメージであると考えられる。

5　夢が意味するもの

キャリバンの夢が、超自然の夢の形態を借りて送り出されたプロスペローの描くイメージだとすると、彼はそのイメージで一体何をキャリバンに伝えようとしたのだろうか。そこでまずは夢を見た当時の二人の関係を明らかにしたい。二人の間には教師と生徒、そして主人と奴隷の二つの関係が存在する。プロスペローが島に来た当初は前者の関係にあったが、その後、後者の関係へと移行する。前者の関係においては教育が重視されたが、後者にあっては使役が中心となる。つまり夢を見た時、そのどちらの関係にあったかでプロスペローのキャリバンに対する態度が大きく変わる。

当時の二人の関係を解く鍵は、皮肉にもキャリバンの台詞の中にある。彼はステファノーを説得する際、自分に都合の悪い事実に限って嘘をついている。

> As I told thee before, I am subject to a tyrant, a
> sorcerer that by his cunning hath cheated me of the is-
> land.　(3.2.40-42)

> Remember
> First to possess his books ; for without them
> He's but a sot, as I am, nor hath not
> One spirit to command—they all do hate him
> As rootedly as I.　(3.2.89-93)

プロスペローは術を用いてキャリバンを騙し、島を奪った訳ではない。またエアリエルが劇中で度重なる仕事を命じたプロスペローに文句を述べたことを除けば、それまで不平不満も言わずに、彼のことを信頼し誠心誠意尽くしてきたことからも（1.2.247-49）、またページェントにおける精霊たちの忠実な働きからもわかるように、全精霊がプロスペローを心底憎んでいるとは考えにくい。つまり、これらはキャリバンが自己の正当性を訴えるためについた嘘だと考えられる。それと同様に、自己の怠惰な性質を誤魔化すためについた嘘がある。

> and sometime voices,
> That if I then had waked after long sleep,
> Will make me sleep again,　(3.2.136-38)

この箇所を含む一連の台詞について、ロバート・グレーブズ（Robert Graves）は「不合理な時制が完璧な時の停止状態を作り出す」（427）と述べ、台詞の特殊性を強調した。だが、ここでの時制の乱れはおそらく事実の歪曲と関係がある。キャリバンは夢の内容を過去の出来事として物語るその前に、「声が眠りを再び誘うことがある」という習慣的事実の中に「もしあの時長い眠りから目覚めたとしても」という仮定の話を挿入する。この挿入は、眠りを誘う声の力を強調するためとも考えられるが、音楽を聞いても誰も眠気を感じていないこの状況下で、それを今訴える必然性は無い。つまり、長く寝ていたという事実を覆い隠すために、敢えて過去の事実に反する仮定を用いたのではないか。

当時の召使たちは、朝から晩まで仕事が与えられており、主人に命じられれば深夜でさえ働かざるを得なかった（Ekirch 158-60）。そうした過酷な労働の後で彼らは床に着くが、その睡眠環境もまた劣悪であった。召使は就寝中であっても、主人の呼びつけがあれば直ちに応じることが求められた。そのため主人の近くで寝かされるか、扉越しの廊下に寝かされることもあった。さらに若者の中には番犬代わりに玄関で寝かされることもあったという。当然、長時間の睡眠は許されておらず、公平な主人とされた者でさえ、召使を長く眠らせておくのは無駄で愚かなことだと主張していた（Richardson 97-98; 111）。

キャリバンはステファノーに召使にさせてくれと頼み込んでいる。それゆえ、もしここで長時間寝ていたことに触れてしまうと、勤勉ではなく怠惰な召使であると自白することになる。さらにプロスペローが極めて寛大な主人ということにもなるだろう。彼を“tyrant”に仕立て上げた以上、それでは都合が悪い。だからこそ夢を見た時の状況の一部を仮定の話にすり替え、誤魔化す必要があったと考えられる。つまり実際には長時間睡眠をとった後で、エアリエルの声で再び眠りに落ち、夢を見たというのが真相であろう。とすれば、それができたのは彼が奴隷として使役される前しかない。

その頃のキャリバンに対するプロスペローの関心事は、彼の教育問題にあった。言語教育では一定の成果を挙げたが、倫理教育に関しては上手くいかなかったようだ。

Abhorrèd slave,
Which any print of goodness wilt not take,
Being capable of all ill ! （1.2.350-52）

最終的にキャリバンは情欲に任せてミランダの暴行を企む。プロスペローはその計画を阻止するが、この時に阻止できたのは決して偶然ではないだろう。第二幕第一場でアントーニオらの心に悪意が芽生え、ナポリ王らに危機が訪れることを予見していたように、キャリバンの中に燻るミランダへの情欲を彼が見過ごすことはなかったはずだ。つまりプロスペローは事件の発生を前

もって察知していたと考えられる。そうであれば、上述した時のように、彼が事前に何らかの対策を講じていたとしても不思議ではない。換言すれば、事件を回避させるため、キャリバンの心に燃え上がる邪な欲望を戒めるような訓育をプロスペローは行っていたのではないか。

もっともこの訓育がどのようなものであったか、具体的なことをプロスペローは一切語っていない。しかしキャリバン同様、ミランダに好意を抱いた若者に対するプロスペローの対応を観察してゆくと、その様相が浮かび上がる。彼もまた、情欲を慎むようプロスペローから厳しく訓育されているのだ。

第一幕第二場でミランダに心を奪われ、求婚を試みるファーディナンドに対し、プロスペローは、簡単に手に入れたのではありがたみがないとして試練を課す（1.2.451-53）。彼はキャリバン同様に屈辱的な丸太運びを強制されるが、ミランダを想うことでそれに耐え忍び（3.1.4-7）、やり遂げる。それによりプロスペローは、彼にミランダを与えると約束するが、婚儀が終わるまでは情欲を抑え、我慢することの重要性を繰り返し諭す（4.1.51-54）。ファーディナンドはそれに対し、次のように答える。

I warrant you, sir,
The white cold virgin snow upon my heart
Abates the ardour of my liver.　　（4.1.54-56）

当時の生理学では愛と情欲の所在に関する活発な議論が繰り広げられており、愛が心臓に、情欲が肝臓にあると考えられていた（Lindley　4.1.55-56n）。つまり彼は、ミランダへの愛が自身の情欲を弱めるとしてプロスペローを安堵させている。それでもなおプロスペローの訓育は祝福のページェントの中で続く。

Here thought they to have done
Some wanton charm upon this man and maid,
Whose vows are that no bed-right shall be paid
Till Hymen's torch be lighted ; but in vain.　　（4.1.94-97）

ここではウェヌスとクピードーの敗北がイリスによって語られる。すなわち、情欲が愛の誓いによって敗れ去り、去ってゆく様がウェヌスらによって擬神化されている。

これらのことから、プロスペローは労働と言葉と魔術によって彼を訓育したと分かる。だが何故過酷な労働を課し、情欲を抑えるよう執拗に諭したのか、また情欲の敗北をページェントの中で鮮やかに見せる必要があったのかについては、ファーディナンドの性質からだけでは説明がつ

かない。ここはキャリバンと比較することで明確になる。

ヴォーン夫妻（Vaughan & Vaughan）は、ファーディナンドとキャリバンを共に情欲を持った人間であると捉え、前者は礼節を知り、自身の情欲を押さえ労働に喜びを感じることができる人だとし、後者は道徳心に欠け、欲望に忠実であるばかりか情欲の虜であるとした（16-17）。無論、夫妻が述べるほどファーディナンドが克己心のある人物だとは言い難い面もある。しかしキャリバンと比較すれば、その差は歴然であろう。ゆえに彼に対しては、キャリバンほど厳しい訓育は必要とされないはずである。だが実際には労働をはじめとした訓育がなされている。これは、先にキャリバンに対して行った訓育が失敗に終わったからではないか。劇中、全てを完璧に整え、自らの意のままに進めたプロスペローの性格を考慮すれば、当然次の機会には失敗しないよう更に厳しい手段を採ったに違いない。それがファーディナンドの訓育に表れていたのだろう。

そうなるとキャリバンの訓育はファーディナンドより緩いものとなる。しかもプロスペロー自身、キャリバンには“humane care”（1.2.346）で接したと語っていることから過酷な労働は課さなかったはずだ。また言葉での訓育に関しては、スティーブン・グリーンブラット（Stephen Greenblatt）が述べるところの、欧州人と現地人の間に存在する測り知れない程の文化的差異（23）のようなものをプロスペローが認識していたとすれば、魔女の子である彼にキリスト教徒の抽象的な概念である情欲の自制を言葉で教えることは不可能であったに違いない。となると魔法による訓育のみが手法として残る。

ここで思い出されるのが、魔法によるページェントである。この場面がエアリエルを通じて具現化されたプロスペローのイメージであることは先に述べたが、これに近いイメージをキャリバンにも夢として見せたのではないだろうか。実際、キャリバンの夢“The clouds methought would open and show riches / Ready to drop upon me,”（3.2.139-40）に表れる“clouds”は、若者たちの情欲を駆り立てようとして失敗したウェヌスらが飛び去る“Cutting the clouds towards Paphos,”（4.1.93）の場面に、“riches”は、ウェヌスらの話の後、天から降ったユーノーの祝福の言葉“Honour, riches, marriage-blessing”（4.1.106）の中に表れている。[(8)] つまり、情欲を撥ね除け、打ち勝つことができれば、名誉や富、そして結婚の祝福が得られるのだというメッセージがあったのかもしれない。またそのように考えると、本来ならばページェントのため魔法に意識を集中させていなければならないはずの時に、何故キャリバンの事を突然思い出し、ミランダが見たこともないと語るほどの激烈な怒り（4.1.144-45）がこみ上げてきたのかについても説明ができる。すなわち祝福のページェントを二人に見せているうちに、かつて似たようなイメージを夢としてキャリバンに見せ、訓育した時のことが記憶に蘇ったのではないか。しかしその夢は彼の意図した結果を生まなかった。それどころか、リンゼイが主張するように、今し方陰謀を推し進める道具として利用されたのである（420）。時が経ち、訓育が無になるどころか負になったのだ。そのことを思い出したが故の怒りであったに違いない。

要するにプロスペローが描いた夢は、訓育を目的に創り出されたものだと考えられる。しかしその意図がキャリバンに伝わることはなかった。夢が、“a most majestic vision”（4.1.118）と婿に絶賛されるほど技巧を凝らした審美的なものだとしても、中身が伝わらなければ何の意味もない。その想いが、自身の魔術に対する一つの答えとなる、“the baseless fabric of this vision”（4.1.151）という言葉を彼に語らせるに至ったのかもしれない。たとえ魔術で他者に意味を込めた夢を送ることができたとしても、その夢自体に説得する力が宿る訳ではない。結局のところ、夢を活かすかどうかは夢を見る者に委ねられているのだ。

結　論

これまでキャリバンの夢は彼自身の願望を表すものと解釈されることが多かった。しかしそこに第三者の意図が存在することを読み取る時、この夢は新たな解釈の可能性を開く。キャリバンの夢には超自然の影響があった。その源泉を辿ると、そこにはプロスペローの姿があった。さらに夢の意味を知ると、夢の真の製造者であるプロスペローの苦悩が渦巻いていた。彼は夢に訓育という意味を持たせ、キャリバンに見せた。しかし夢を見たキャリバンはもう一度見たいと泣くばかりであり、その意図を理解することは決して無かった。夢はそれを見た当人に何か重要な示唆を与えるものだと当時多くの人々は信じていたが、当人がその意味を知ろうとしなければ夢は夢のままで終わるのである。だがキャリバンの夢の複雑さは、その生成過程に加えて、時を経て暗殺のための道具として再利用される点にある。中身を伴わない夢の美しさだけが強調され、そこに別の解釈が加わり、意味が塗り替えられてゆく。今や訓育の夢は、夢を生み出した者の命と引き換えに得られるであろう褒美の夢へと変容したのである。プロスペローの言葉“all, all lost, quite lost ;”（4.1.190）には、キャリバンに対する絶望のみならず、夢に込めた自身の想いの喪失も含まれているに違いない。

註

（1）　本論における幕場への言及および引用は、全てスティーブン・オーゲル編集のオックスフォード版『テンペスト』に拠る。

（2）『ロミオとジュリエット』のマキューシオが語った夢の解釈に近いものがある（1.4.53-103）。

（3）　アンドリュー・ウィレット（Andrew Willet, 1562-1621）の解説では、超自然の夢は霊的な教示や説諭のために神から贈られるもの、またはこれから起こる意味から生じるものとある（30）。つまり彼の考えでは神聖な夢も超自然の夢の範疇に入る。

（4）　ただし食事の影響については触れられていない。

（5）　この点に関してウィレットは、悪人や不信人な者であっても神聖な夢を見る場合があるとした。ただしこの場合、夢の内容はその悪人のためではなく神の教会の幸福のためである（34）。

（6）　四体液説は、体液に関するヒポクラテスの理論を発展させたガレノスによって広まり、その後17世紀に至るまで欧州の医学・文化に多大な影響を与えたとされる。

（7）　キャリバンは一人でいる時だけでなく（2.2.1-4）、ステファノーに自分を売り込んでいる時でさえも、呪い

の言葉を発している（2.2.156）。

（8） ただしホーランドはこれらの台詞をキャリバンが実際に聞いたり話したりしたものではないとして、彼の夢との関連性を否定している（117）。

引用参考文献

Babb, Lawrence. *The Elizabethan Malady: A Study of Melancholia in English Literature from 1580 to 1642*. Michigan state college P, 1951.

Babington, Gervase. *A Very Fruitful Exposition of the Commaundements*. 1583, STC (2nd ed.) / 1095.

Brooks, Harold F. "'*The Tempest*': What Sort of Play? (Annual Shakespeare Lecture)." *Proceeding of the British Academy*. vol. 64, 1978, pp. 27-54.

Brown, Paul. "'This Thing of Darkness I Acknowledge Mine': *The Tempest* and the Discourse of Colonialism." *Political Shakespeare: New Essays in Cultural Materialism*. Edited by Jonathan Dollimore and Alan Sinfield, Cornell UP, 1995, pp. 48-71.

Byfield, Nicholas. *The Rule of Faith*. 1626, STC (2nd ed.) / 4233.3.

Comito, Terry. "Caliban's Dream: The Topography of Some Shakespeare Gardens." *Shakespeare Studies,* Jan 1, 1981, pp. 23-54.

Cooper, Thomas. *The Mystery of Witch-craft Discouering*. 1617, STC (2nd ed.) / 5701.

Dowden, Edward. *Shakespeare: A Critical Study of His Mind and Art*. Cambridge UP, 2009.

Draper, John W. *The Humours & Shakespeare's Characters*. AMS Press, 1965.

Ekirch, A. Roger. *At Day's Close: Night in Times Past*. Norton, 2005.

Fiedler, Leslie A. *The Stranger in Shakespeare*. Stein and Day, 1972.

Frye, Northrop. *A Natural Perspective; The Development of Shakespeare Comedy and Romance*. Columbia UP, 1967.

Gilbert, Allan H. "'*The Tempest*': Parallelism in Characters and Situations." *The Journal of English and Germanic Philology,* vol. 14, no. 1, 1915, pp. 63-74.

Graves, Robert. *The White Goddess*. Farrar, Strauss and Giroux, 1984.

Greenblatt, Stephen. *Learning to Curse: Essays in Early Modern Culture*. Routledge, 1990.

Gurr, Andrew. "Industrious Ariel and Idle Caliban." *Travel and Drama in Shakespeare's Time,* edited by Jean-Pierre Maquerlot and Michele Willems, Cambridge UP, 1996.

Holland, Norman. "Caliban's Dream." *Psychoanalytic Quarterly,* vol. 37, 1968, pp. 114-25.

Kermode, Frank. *Shakespeare's Language*. Penguin UK, 2001.

Knight, Wilson G. *The Crown of Life*. Methuen & Co. Ltd., 1948.

Langton, Christopher. *An Introduction Into Phisycke*. 1545, STC (2nd ed.) / 15204.

Lindsay, Tom. "'Which First Was Mine Own King': Caliban and the Politics of Service and Education in *The Tempest*." *Studies in Philology,* vol. 113 (2) , pp. 397-423.

Mandel, Jerome. "Dream and Imagination in Shakespeare." *Shakespeare Quarterly,* vol. 24, no. 1, 1973, pp. 61-68.

McDonald, Russ. "Reading *The Tempest*." *Critical Essays on Shakespeare's* The Tempest. Edited by Virginia Mason Vaughan and Alden T. Vaughan, G. K. Hall, 1998, pp. 214-33.

Person, David. *Varieties*. 1635, STC (2nd ed.) / 19781.

Richardson, R. C. *Household Servants in Early Modern England*. Manchester UP, 2010.

Schlegel, A. W. *Lectures on Dramatic Art and Literature*. Translated by John Black, G. Bell & Sons, 1886.

Shakespeare, William. *The New Oxford Shakespeare: The Complete Works: Modern Critical Edition*. General editor, Gary Taylor, et al., Oxford UP, 2016.

————. *The Tempest*. Edited by David Lindley, Cambridge UP, 2005.

————. *The Tempest*. Edited by Stephen Orgel, Oxford UP, 1998.

Spencer, Theodore. "Shakespeare and the Nature of Man: *The Tempest*." *Shakespeare Modern Essays in Criticism*. Edited by Leonard F. Dean, 1967, pp. 456-61.

Thomas, Keith. *Religion and the Decline of Magic: Studies in Popular Beliefs in Sixteenth and Seventeenth-century England*. Penguin Books, 1971.

Tomlinson, Gary. "The Matter of Sounds." *Gary Shakespeare Studies,* vol. 28, 2000, pp. 236-39.

Vaughan, Alden T. and Virginia Mason Vaughan. *Shakespeare's Caliban: A Cultural History*. Cambridge UP, 1991.

Vaughan, William. *Approved Directions for Health*. 1612, STC (2nd ed.) / 24615

Willet, Andrew. *Hexapla in Danielem*. 1610, STC (2nd ed.) / 25689.

Wright, Neil H. "Reality and Illusion as a Philosophical Pattern in *The Tempest*." *Shakespeare Studies,* Jan 1, 1977, pp. 241-70.

武井ナヲエ『シェイクスピアと夢』、南雲堂、2005年。

中野春夫「魔術のメタモルフォシス」『エリザベス朝演劇の誕生』、玉泉八洲男編、水声社、1997年。